

平成29年度



白川小だより

第8号 平成29年10月31日(火)

文化を継承する力

学校長 井戸 さえ子

紅葉狩りの季節となりました。朝日に照らされた飛騨川沿いの山々も錦の彩りを次第に深めているようです。「実りの秋」「食欲の秋」「芸術の秋」「読書の秋」等、秋たけなわに、いずれかたっぷりと味わいたいものです。

学校では、「図書館祭り」が行われ、様々なチャレンジやお楽しみが詰まった「スタンプラリー」を全校で行いました。その中の課題の一つは、「図書委員会の読み聞かせか、『三日月堂』に参加」という項目です。ですから今回の「三日月堂」は大繁盛。語り聞かせは「天狗の鐘八」。鐘八というのは江戸時代に白川町小川の里に住んでいたという忍者です。里の子どもらに親しまれながら2年ほど里で生活しましたが、とうとう追手がやってきて凄まじい抗戦の末、姿を消します。鐘八をてっきり死んだと思い込んだ村人たちは丁寧に弔い、今も鐘八の墓が実在するという話です。昔話は「わらしべ長者」。やがて長者となる貧しい男が、侍からもらった3つのみかんを、喉が乾いたという商人に3つとも渡す場面で、「3つも?」「1つでもいいのに」という小さなつぶやきが聞こえてきました。本のみかんは大きく立派で輝くばかりに鮮やかに描かれていて、子どもたちの思いも納得できます。みかんのお礼としてもらった美しい三反の布さえ、死にかけた馬を手に入れるため、ためらいもなく手放します。男の無欲な施しが、やがて長者へとつながるといってお話に子どもたちはじっと聞き入っていました。

11月3日は「文化の日」。白川小学校もやや大仰に聞こえるかもしれませんが「環境・礼儀・読書の文化を育む学校」としています。文化とは、集団の取組が長い年月の中で受け継がれ続け、練り上げられてきたものです。文化を築くためには、お互いが考えや気持ちを持て十分理解し合い、その価値を共有できることが大事です。それができるのは言葉や想像する力を持っている人間だけ。「三日月堂」で子どもたちがじっくりと聞いてくれた、あの小川の里の人々の『人を憐れみ、慈しむ心』や「わらしべ長者」の貧しいけれど『相手に施す心』等、人として望ましいふるまいや生活の仕方につながる心の有り様は不易なものです。それが少しでも子どもたちの胸に届けばと願っています。

「美しくしておく文化」「読書・古典に親しむ文化」「礼儀正しく行動する文化」と本校が掲げる文化を継承するには、「不易なものを大切にし、人間らしい力を高めることだ」と、文化について考える月に改めて思うこの頃です。